

存立の餘地無きものといはなければならぬ。第二の理由は繰り返すまでもなく、碑文に記さるゝ新宗教はネストル教で無くして摩尼教であり、また其の文字は回鶻字で無くしてソグド字なること、前述の通りであるから、これもまた成立すべきでない。かゝる譯であるから曾て一般に信ぜられた回鶻字の源流に關する説は全く根據を失つたもので、其の系統と製作とについては、今や全く別の説明が加へられることに成つた。

一九〇七年にミューラー氏は早くも回鶻文字はソグド文字を襲用したものに外ならぬと説いたが、ついでゴーチオ氏は一九一一年にソグド文字に關する説を發表して全くミューラー氏に賛し、ソグド字は中亞から發掘せらるゝ楷體の回鶻文字とは甚だ近く、其の相違はソグド字が比較的古き性質を有する點に在りとして、一々の文字について其の所論を確め、遂に之を以て摩尼教徒の用ひたソグド文字から發達したものであることを論定した。かくて今日では獨佛の學者は回鶻字を「若きソグド文字」「後のソグド文字」とも呼ぶことになり、廣く一般の學界から認められて居る次第である。

以上述べた所によつて、所謂回鶻文字なるものは摩尼教徒の用ひたソグド文字に出で、而して八世紀の前半には既に高昌に接した突騎施地方に於て行はれて居つたものであることを明にした。突騎施の根據地とした碎葉城地方はソグディアナと共に早くより摩尼教の一派と見らるゝマズダク派の行はれた處であるから、此の文字もまた此の教の僧侶の傳ふる所となつて、何時からの事か判然とは定め難いが此の地方に行はれたものであらう。